

I. 導入

おはようございます。今日は、感謝の心を育むことについてお話したいと思います。私たちも、感謝することを身につけたいものです。たいていの人は、親切にされると「ありがとう」と言います。教会では、私たちは神の祝福を感謝します。とくに、祈りがはつきりと応えられると感謝します。けれども、つらい時や思うようにことが運ばない時も私たちは感謝しているでしょうか。

テサロニケ第一5:18で、パウロは次のように記しました。「**どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。**」神のみこころは、どんな状況でも私たちが感謝することです。苦労が絶えない時、貧しい時、家族と大ゲンカをした時、私たちは何をすべきでしょうか。感謝です。もちろん、苦労そのものをうれしいとは思いません。けれども、主がともにいてくださることを確信し、私たちの涙でさえも祝福をもたらすために用いてくださると信じるなら、どんなことにも感謝できるようになるでしょう。

ヘブル11:1は語ります。「**信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。**」神が祈りに応えてくださったことを感謝するのは簡単です。一方、答えをいただく前に感謝を捧げるなら、それは信仰を働かせていると言えるでしょう。人生の荒波にもまれながら、神の愛を信頼し、神の約束を信じつづけるには、信仰が要ります。神の約束を信じる道を選ぶなら、嵐の中でも勇氣と元気が与えられます。いつか困難から救い出してくださることを信じ、前もって感謝をささげるとき、信仰は成長します。私たちを取り巻く状況ではなく、神の約束が、私たちにとっての現実となります。嵐の中に置かれたクリスチャンにとってとても役立つ約束がローマ8:28にあります。「**神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています。**」神を愛することと、神の約束を信じることに専念するなら、常に平安をもって感謝をささげられるようになるでしょう。

先週のメッセージで、パウロと一行は激しい嵐に見舞われました。それは、台風のような大嵐でした。今日の個所で、一行は嵐を切り抜け陸地にたどり着きます。嵐の中にいるときも、パウロが感謝をささげる様子に注目してください。



では、使徒27:27-44を読みましょう。

II. 聖書朗読(使徒言行録27:27-44, 新共同訳)

27:27 十四日目の夜になったとき、わたしたちはアドリア海を漂流していた。真夜中ごろ

船員たちは、どこかの陸地に近づいているように感じた。27:28 そこで、水の深さを測ってみると、二十オルギアあることが分かった。もう少し進んでまた測ってみると、十五オルギアであった。27:29 船が暗礁に乗り上げることを恐れて、船員たちは船尾から錨を四つ投げ込み、夜の明けるのを待ちわびた。27:30 ところが、船員たちは船から逃げ出そうとし、船首から錨を降ろす振りをして小舟を海に降ろしたので、27:31 パウロは百人隊長と兵士たちに、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたは助からない」と言った。27:32 そこで、兵士たちは綱を断ち切って、小舟を流れるにまかせた。

27:33 夜が明けかけたころ、パウロは一同に食事をするように勧めた。「今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食べずに、過ごしてきました。27:34 だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。」27:35 こう言ってパウロは、一同の前でパンを取って神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。27:36 そこで、一同も元気づいて食事をした。27:37 船にいたわたしたちは、全部で二百七十六人であった。27:38 十分に食べてから、穀物を海に投げ捨てて船を軽くした。

27:39 朝になって、どこの陸地であるか分からなかったが、砂浜のある入り江を見つけたので、できることなら、そこへ船を乗り入れようということになった。27:40 そこで、錨を切り離して海に捨て、同時に舵の綱を解き、風に船首の帆を上げて、砂浜に向かって進んだ。27:41 ところが、深みに挟まれた浅瀬にぶつかって船を乗り上げてしまい、船首がめり込んで動かなくなり、船尾は激しい波で壊れだした。27:42 兵士たちは、囚人たちが泳いで逃げないように、殺そうと計ったが、27:43 百人隊長はパウロを助けたいと思ったので、この計画を思いとどまらせた。そして、泳げる者がまず飛び込んで陸に上がり、27:44 残りの者は板切れや船の乗組員につかまって泳いで行くように命令した。このようにして、全員が無事に上陸した。

III. 教え

全員無事に陸に上がりましたが、そこはどこでしょう。それはマルタ島でした。この場所は後にセントポール湾と呼ばれるようになりました。観光ガイドにあるこのような写真では美しい場所ですが、嵐が来ていけばまったく違った景色でしょう。泳げない者がたくさんいたにもかかわらず、276名全員が無事に船から陸に上がったのは驚異的と言えます。そこは浅瀬でしたが、嵐による高波によって、容易に溺れるような状況だったからです。



なぜ全員無事だったのでしょうか。彼らに知恵があったからではありません。一行は軽率でした。パウロの警告を聞き入れず、クレタを出航しました。強かったからでもありません。何日間も食べておらず、嵐と闘っていたせいで疲れ果てていました。彼らに勇気があったからではありません。船の乗組員は、他の人たちを残して救命ボートで逃げようとしてしました。うまく船を操縦したからでもありません。嵐に呑まれた船は操縦不能で、砂浜に近づくや否や、必死で陸に上がり

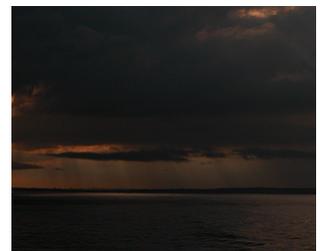
ました。

全員が無事に陸地に到着できたのは唯一、神の恵みによります。彼らは罪深く粗暴な人々でした。神に親切にさせていただくのにお返しの人たちではありませんでしたが、パウロは彼らのために祈りました。これに対し、神は約束をもって応えてくださいました。先週の聖書箇所にもその約束がありました。パウロは次のように言って、大丈夫だと語りかけました。(使徒27:23-24)

「27:23 わたしが仕え、礼拝している神からの天使が昨夜わたしのそばに立って、27:24 こう言われました。『パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ。』」

先週も話したとおり、これは私個人の解釈ですが、この人たちはきっと天国にいると思います。恵み深い神はパウロの祈りに応え、一緒に船に乗っている人の命を任せてくださいました。パウロがどのように祈ったかはっきり書かれていませんが、単に命が助かるようにと祈ったとは思えません。きっと、一人ひとりのたましいが救われるようにと祈ったことでしょう。また、船に乗っている間はずっと、皆にイエスのことを伝えたはずで、たくさんの人に福音を告げ知らせることのできる環境で、パウロが黙ってはいなかったでしょう。船の上ですから、人々にはパウロから逃げる場所はありません。もう聞きたくないパウロを海に投げ入れることもできません。護送中のパウロには常にローマ兵の監視があったからです。

パウロは伝道者です。伝道者とは不思議な人間です。危機に直面する275名もの人に毎日伝道するチャンスが与えられるなら、喜んでしけの海に二週間留まるという伝道者は少なくないでしょう。そのような状況では、もちろん言葉だけの伝道というわけにはいきません。それに伴う行動が要求されます。一方、人は嵐に巻き込まれるという非常事態のもとで、平常時に比べて福音に耳を貸そうという気になりやすいようです。船旅が終盤を迎え、一行は陸地に近づいていることに気づきました。夜が明けると、船を入り江につけて島に上陸しようとしま



使徒27:33-36をもう一度よく見てみましょう。「27:33 夜が明けかけたころ、パウロは一同に食事をするように勧めた。『今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食べずに、過ごしてきました。27:34 だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。』27:35 こう言ってパウロは、一同の前でパンを取って神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。27:36 そこで、一同も元気づいて食事をした。」

船はまだ危機的な状況にあったように見えてましたが、神の約束は確実ですから、パウロは全員が無事であると確信していました。パウロは人々を安心させ、パンを取って神に感謝をささげ、それを裂いてみんなで食べました。この場面から、何かを連想しませんか。聖餐式のようなですね。ここには杯について書かれていませんが、おそらくワインもあったでしょう。ワインは当時、一般的な飲料でした。荒れた海の危険からはまだ助かっていませんでしたが、パウロは感謝をささげました。神の約束を信じたからです。同時に、彼らのたましいが救われることを感謝

していたのでしょう。その救いは、十字架で成し遂げられたキリストの御業のおかげです。

パウロが取った行動から、感謝する姿勢がうかがえます。暗い嵐が何日も続いたことに愚痴をこぼさず、感謝をささげました。私たちは試練にどう向き合うでしょう。困難で不快なことが起こったら、不平不満を言うのでしょうか。それとも感謝をささげるのでしょうか。感謝の心を持てば、試練に遭っても喜べるようになります。

では、感謝の心を育むにはどうすればよいでしょう。それには、与えられた祝福を覚えて、ひとつひとつ感謝することです。最初はなかなかできないかもしれませんが、次第に習慣となっていくます。そうすれば、喜びが湧いてくるでしょう。感謝することを身につける上で、最大の励みとなるのはイエスの模範です。ルカ22:19-20を見てください。「22:19 それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。『これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。』22:20 食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。『この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。』」イエスはこのとき、まもなく捕らえられて暴力や侮辱を受けた後、十字架にかけられることをご存知でした。そのときイエスはどうされたでしょう。感謝の祈りを唱えられました。ご自身の苦しみによって、イエスを信じるすべての人の救いがもたらされると知っておられたからです。

主イエスこそ、感謝の心を持つこの上ない模範です。また、ペトロやパウロ、ヨハネ、ステファノなど、聖書の登場人物の人生も、感謝の心を持つ励みとなります。その他の兄弟姉妹からも、教えられたり励まされたりすることがあります。ここで、例をふたつ挙げましょう。

プリシラ・モーリスは、19世紀の英国人作家です。海外宣教を強く望んでいましたが、神が与えられた使命は、地元で病気の人々を看護することでした。プリシラは著名人ではありません。彼女はその謙虚さから、匿名で著作を出版しました。その中で、感謝の心を育むことについて記しています。

「まず、小さなことを主に感謝しましょう。そして日々、また別のことを見つけて神をたたえましょう。そうすれば、神に感謝できる物事はうんと増えます。同時に、不平不満を言いたくなる物事は減っていきます。ついには、目に入るものすべてに、感謝する理由を見出すことができるようになるでしょう。」

名高い聖書注解者マシュー・ヘンリーは、どんな状況でも感謝をささげることを心得た人でした。ある晩、強盗に遭った彼はこう祈りました。

「まず、強盗に遭ったのは初めてであり、今まで守られてきたことを感謝します。次に財布は盗まれたが、命は奪われなかったことに感謝します。更に全財産を盗られたが、その額はたいしたものではなかったことに感謝します。最後に自分は強盗に遭ったのであって、自分が強盗をしたのではないことに感謝します。」

感謝の心は常に何か感謝すべきことを見つけ、不平や悲しみから私たちを救い出してくれます。人は落ち込んでみじめな気持ちになると、そのことを自分の置かれた環境や周囲の人のせいにしたくなります。けれども、幸せを感じられない本当の理由は、与えられた祝福に感謝しない私たち自身の心の問題なのです。あれこれ愚痴を並べがちですが、祝福されたことを思い起こして並べてみれば、喜びを見出すことができるでしょう。

残念ながら、神からたくさんの祝福をいただいた人たちの間でも、感謝の心は稀です。重い皮膚病を患った10人の人の話から学びましょう。

ルカ17:12-18 「 17:12 ある村に入ると、重い皮膚病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、 17:13 声を張り上げて、『イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください』と言った。 17:14 イエスは重い皮膚病を患っている人たちを見て、『祭司たちのところに行って、体を見せなさい』と言われた。彼らは、そこへ行く途中で清くされた。 17:15 その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。 17:16 そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。 17:17 そこで、イエスは言われた。『清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。 17:18 この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。』」

私自身、感謝の心を欠いていることが多いと思います。イエスに癒していただいても、お礼を言おうと戻ってはこなかった9人のようです。私はそんな自分を変えたい、感謝の心をもっと持ちたいと思います。皆さんも、私といっしょに努力していきませんか。感謝の心がなかったことを悔い改めて、どんな状況でも感謝することを学びましょう。祝福されたら感謝するのはもちろん、祝福がまだ見える形でなかったとしても、喜びと感謝をささげたいものです。神のすばらしい愛と大いなる約束が与えられているからです。

何より、イエスが十字架上の死と復活によって可能にくださった救いに感謝をささげましょう。私たち一人ひとりが、イエスを信じ、罪の赦しと永遠の命という無償の賜物をいただくことができるようにと祈ります。これはイエスを信じるすべての人に与えられるものです。

IV. 結び

今日のメッセージのまとめとして、ぴったりの賛美があります。ともに、「望みも消え行くまでに」を賛美しましょう。その後、祈ります。

望みも消え行くまでに 世の嵐に悩む時
数えてみよ主の恵み なが心は安きを得ん

数えよ主の恵み 数えよ主の恵み
数えよ一つずつ 数えてみよ主の恵み

主の給いし十字架を 担いきれず沈む時

数えてみよ主の恵み つぶやきなどいかであらん

世の楽しみ 富 知識 なが心を誘う時

数えてみよ主の恵み あまつくにの幸（さち）に酔わん

V. 祈り